

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランツ・フーマン 夢文学の構想
Author(s)	クライナート, 友美
Citation	広島ドイツ文学 , 32 : 21 - 38
Issue Date	2020-01-15
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048539">http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048539</a>
Right	Copyright (c) by Author
Relation	



## フランツ・フューマン 夢文学の構想

クライナート 友美

### 1. はじめに

フランツ・フューマン(1922-1984)<sup>1</sup>は青年時代から夢に興味を抱き、習慣的に自身の夢を書き留めていた。<sup>2</sup>初めは自己研究の為に始めた夢日記であったが、次第に夢への興味は増幅していき、夢に関する膨大な書物を集めるようになる。ベルリンの市立図書館<sup>3</sup>には、彼の蔵書が約 17000 冊収められているが、<sup>4</sup>そこには、ジークムント・フロイト(1856-1939)や C.G.ユング(1875-1961)をはじめとし、多種多様な精神分析、心理学者の本が 1000 冊以上も並んでいる。夢の文学への可能性に気付いた時、彼はウィリアム・シェイクスピア(1564-1616)やジャン・パウル(1763-1825)、E.T.A. ホフマン(1776-1822)、<sup>5</sup>ゲオルク・トラークル(1887-1914)等の文学を通して夢を追求するのみならず、心理学的な面からも「夢」について徹底的に研究したのである。そして、彼は生涯にわたり 500 にもおよぶ夢を書き残し、夢文学の制作に励んだ。<sup>6</sup>しかし、フューマンの「夢の本」出版への道のりは容易いものではなかった。彼が出版を叶えたのは、13 の夢を含む小規模な作品集一冊のみで、長年夢みた、大規模な「夢の本」出版の夢は果たされることはなかった。それでも、その夢を彼が諦める瞬間はなかった。彼は、「夢の本」完成を目指し、仕事机の上に大量の夢のファ

---

<sup>1</sup> フランツ・フューマン(Franz Fühmann)は、東ドイツで活躍した作家である。1949 年、第二次世界大戦後、ロシアの捕虜から解放され、社会主義に期待を抱いた彼は、東ドイツでの生活を決意し、その後ベルリンとブランデンブルク州のメルキッシュブッフホルツで暮らした。1958 年まで NDPD(ドイツ国家民主党)で働きつつ、作家活動を行っていたが、その後作家活動のみに専念することを決意した。多様なジャンルで文化活動を行い、数々の文学賞を受賞、また若い作家達を助成した。プラハの春や、ヴォルフ・ビヤマン事件等、社会主義の理想と現実絶望することがあっても、社会主義者であり続けた。多くの作家が西ドイツに移り住んだが、東ドイツに留まり熱心に創作活動を続けた。1984 年 7 月 8 日、壁崩壊、ドイツ統一を見る事なく、癌で亡くなった。

<sup>2</sup> Vgl. Ingrid Prignitz: Nachwort. In: Unter den Paranyas. Rostock: Hinstorff Verlag 1988, S. 205.

<sup>3</sup> Die Historischen Sammlungen der Zentral- und Landesbibliothek zu Berlin.

<sup>4</sup> 約 17000 冊というのは、ベルリン市立図書館のフランツ・フューマンの蔵書管理者、フォルカー・シャルネフスキー(Volker Scharnefsky)氏から筆者が直接聞いたものである。

<sup>5</sup> フューマンはホフマン、また彼に関する本を計 200 冊以上所有した。

<sup>6</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 38.

イルを広げたまま、亡くなったのである。<sup>7</sup>それを見た当時の彼の担当編集者イングリッド・プリグニッツ(1936-)<sup>8</sup>は、彼の死後『Paranyas の間で』(*Unter den Paranyas*) (1988)というフューマンの夢を集めた作品を出版した。その本では、彼の初期の作品の夢小説『夢 1958』(*Traum 1958*) (1959)や『22 日間 それとも 人生の半分』(*Zweiundzwanzig Tage oder Die Hälfte des Lebens*) (1973)に導入されている夢、また一部の夢小説が紹介されている。ただ、この本はあくまでもフューマンの夢への取り組みを紹介することを目的に作られており、フューマンの目指した「夢の本」の主旨とは異なっている。というのも、彼は自ら 1970 年のインタビューで、『夢 1958』は文学的に失敗した夢小説だと述べており、彼の「夢の本」に含まれる予定のなかった作品だからである。<sup>9</sup>現在、ベルリン芸術アカデミー<sup>10</sup>では彼の残した未発表の大量の夢を読むことが出来る。そこでは、300 以上のタイプライターで打たれた夢テキスト、更に手書きの夢テキスト、合わせて約 400 にも及ぶ夢テキストが閲覧可能である。その数からも、如何にフューマンが夢というテーマに真剣に取り組んできたかが明らかである。本稿では、なぜフューマンがこれほどまでに夢に関心を持ったのか、また彼の目指した「夢の本」の構想はどのようなものだったのか、その軌跡に迫っていきたい。

## 2. 夢への興味の発端

### 2.1. 自己分析の為の夢日記

フューマンの夢日記は当初、自己分析を目的としていた。<sup>11</sup>覚醒下の世界とは違い、夢という、無意識の世界下での自身の行動、言動、を記録することによって、自身に秘められている粗野で野性的な人間性に迫ろうとしたのである。

Träume sind ja nicht steuerbar, nicht beeinflussbar. Für sie gelten nicht die Regeln, mit denen der Mensch seine Tage organisiert. [...] Unsere heutige Kultur möchte das Wachsein zu einem Reich des uferlosen Verstandes gestalten; im Traum aber wird das als aufgeblasener Größenwahn entlarvt.<sup>12</sup>

夢はコントロールすることも、影響を与えることも出来ない。夢の世界では、我々が

<sup>7</sup> Vgl. Ingrid Prignitz: Nachwort. In: *Unter den Paranyas*. Rostock, S. 224.

<sup>8</sup> イングリッド・プリグニッツ(Ingrid Prignitz)は、フューマンの 2 人目の、かつ最後の担当編集者。

<sup>9</sup> Vgl. Josef-Hermann Sauter: Interview mit Franz Fühmann. In: *Positionen der DDR-Literaturwissenschaft Auswahl aus den Weimarer Beiträgen (1971-1973) Band 2*. Kronberg/Taunus: Scriptor Verlag 1974, S. 41.

<sup>10</sup> Archiv der Akademie der Künste zu Berlin

<sup>11</sup> Vgl. *Unter den Paranyas*, S. 205.

<sup>12</sup> 本論文の引用の訳は全て筆者によるものである。László Földémyi: *Abgrund der Seele*. München: Mattheus & Seitz 1994, S. 18.

覚醒下で作り上げた規則は適用されない。今日の我々の文化では、覚醒状態を際限のない悟性の領域に仕立て上げようとする。しかし、それは夢の中で、膨らんだ誇大妄想であると暴かれるのである。

これは、ハンガリーの文芸評論家のラースロー・フォルデニー(1952-)<sup>13</sup>の『魂の深淵』(*Abgrund der Seele. Goyas Saturn*) (1994)での言葉である。夢を記録すること、それは、自分の知らぬ一面を記録することを意味している。

作家で、ゲッティンゲン大学の数学と物理学の教授だったゲオルク・クリストフ・リヒテンベルク(1742-1799)も、フューマンと同じように夢から自己分析を行った人物で、「Ich weiß aus unleugbarer Erfahrung, daß Träume zur Selbsterkenntnis führen.」<sup>14</sup> (私は否定できない経験から、夢を自己認識へと導く方法を知っている。)と断言している。フューマンは夢研究の為に、様々な夢に関連する言葉を手記に書き留めていたのだが、リヒテンベルクのこの言葉もその中に記されている。<sup>15</sup> 彼等の共通点は、どちらも心理学者でないのにも関わらず、尋常でない程夢に興味を持ち、生涯夢を研究したということである。リヒテンベルクは、夢から自身の人間性を決定づけることが可能だと確信していた。<sup>16</sup> フューマンも彼と同様の考えで、インタビューで以下のように述べている。「Etwas in Ihnen weiß es besser. Das meldet sich dann in der Nacht. Das ist dann da. Sie werden mit Wünschen oder Abgründen konfrontiert, die Sie am Tag vor sich zudecken; [...]」<sup>17</sup> (それは、あなたの中にある何かをよく知っています。それは夜に告げられ、夜の間存在します。あなたは昼間覆い隠されている願望や知られざる領域に直面することになるのです。)

ヒトラーを支持し、1939年ナチスドイツの国防軍に志願、その後1945年から1949年までソ連の捕虜となったフューマンは、過去に対する大きな罪意識、深いトラウマを抱えていた。<sup>18</sup> 1973年の『22日間 それとも 人生の半分』の作品の中でも、彼に付きまとう罪悪感、それと如何に付き合っていくべきなのか、ということは重要なテーマとなっている。<sup>19</sup> 実際

---

<sup>13</sup> ラスロー・フォルデニー(László Földényi)はハンガリーのエッセイスト、文芸評論家、翻訳家。

<sup>14</sup> Georg Christoph Lichtenberg: Aphorismen. Zürich: Manesse Verlag 1947, S. 288.

<sup>15</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 194.

<sup>16</sup> Vgl. Ignaz Jazower: Das Buch der Träume. Berlin: Ernst Rowohlt Verlag 1928, S. 497.

<sup>17</sup> Heinz Blumensath: Franz Fühmanns letztes Interview. In: „Auf's Ganze aus sein“ Franz Fühmann in seiner Zeit. Berlin: Friedrich Ebert Stiftung 2016, S. 99.

<sup>18</sup> フューマンは『22日間 それとも 人生の半分』の中で以下のように書いている„Meine Generation ist über Auschwitz zum Sozialismus gekommen. Alles Nachdenken über unsere Wandlung muß vor der Gaskammer anfangen, genau da“ (私の世代はアウシュビッツから社会主義にきた世代である。ガス室、そこからまさに、我々は全てを考え始めねばならない) Franz Fühmann: Zweiundzwanzig Tage oder Die Hälfte des Lebens. Rostock: Hinstorff Verlag 1974, S. 153.

<sup>19</sup> Vgl. Brigitte Krüger: Der Traum vom „Buch der Träume“. Franz Fühmanns Traumkonzept. In: Text + Kritik. München: Richard Boorberg Verlag 2014, S. 45f.

に、フューマンの夢日記を眺めてみると、度々、兵隊、戦争、ヒトラー、ナチスドイツ国防軍、捕虜、反ファシスト学校等がモチーフとして頻繁に登場する。彼は、そんな数々の辛い夢も区別する事なく記録し、探究した。夢を用いての自己分析は、辛い過去と向き合うこともあり、精神的に楽なものではなかっただろう。彼は自身の夢プロジェクトを「Herzens Schmerzens Kind」(心の痛みの子ども)と名付けて呼んでいた。<sup>20</sup>その命名からも、彼にとって夢が、ただ幻想的な存在なのではなく、過去の痛みと深く結びついていることが明らかである。

## 2.2. フロイトとの出会い

自己分析の為であった夢が、本格的な夢研究へと発展していく転機は、ジークムント・フロイトとの出会いにある。当時、ドイツ民主主義共和国(Deutsche Demokratische Republik)<sup>21</sup>の文化政策は、国民を社会主義的意識へと啓蒙、教育する為、作家に文学作品の中で「現実」(Wirklichkeit)を描くことを強く求めた。<sup>22</sup>しかしこのDDRの文化政策の主張する「現実」概念は問題が多かった。

Die Schwierigkeit liegt darin, daß jeder etwas anderes unter „wahr“ und „wirklich“ versteht. Die meisten verstehen darunter nur das Derb-Wirkliche. Das Sichtbare und das Greifbare.<sup>23</sup>

困難な点は、誰もが「真実」と「現実」を幾らか異なって解釈している事にある。大半の人々は、目に見え、手で掴むことの出来る存在だけを「現実」だと思っているのである。

アンナ・ゼーガース(1900-1983)<sup>24</sup>の小説『旅での出会い』(*Die Reisebegegnung*) (1972)におけるこの文は、DDRの文化政策が打ち出す現実概念を的確に指摘している。つまりDDRの求める「現実」とは、限定された、目に見える現実をただ空想抜きで表すことだったのである。それ故、ロマン主義をはじめとする、感情や空想、神秘的な体験等を好んで描いた文学を、その方針に反するものとして軽視した。それは文学や芸術の枠に留まらず、それに関わる学問知識をも排斥することとなった。夢を学術研究の対象とした、革命的なフロイトの研究も、DDRでは見て見ぬ振りをされていたのである。1957年、当時ドイツ国家

<sup>20</sup> Vgl. Oliver Wieters: Der Traum als literarische Form: Franz Fühmann. Traum-Erzählungen und -Notate, Tübingen 1990, S. 17.

<sup>21</sup> Deutsche Demokratische Republik は略して DDR と呼ばれた。以下 DDR と表記する。

<sup>22</sup> 東 憲二:「社会主義」の発展と崩壊の過程における文学(東ドイツ短編集刊行委員会編「エルベは流れる—東ドイツ短編集—」(同学社), 1992年, 312~318頁所収) 311頁参照。

<sup>23</sup> Anna Seghers: Die Reisebegegnung. In: Erzählungen 1963-1977. Berlin/Weimar: Aufbau Verlag 1981, S. 505.

<sup>24</sup> アンナ・ゼーガース(Anna Seghers)は小説家、エッセイスト。

民主党(National-Demokratische Partei Deutschlands)で働いていたフューマンは、このことに疑念を抱き、批判した。<sup>25</sup>「Ich bin zum Beispiel der Meinung, daß das hartnäckige Ignorieren der großen psychologischen Erkenntnisse durch den Sozialismus ein zumindest konservativer Zug ist.」<sup>26</sup>

(私は例えば、社会主義が偉大な心理学の知識を頑なに無視する態度を少なくとも保守的な動きであると考える。)結果的に、DDRの偏狭な態度は、彼の夢への関心に拍車をかけることとなった。彼は、フロイトの著作をDDRにもたらすために尽力したのである。そして遂に、1982年にVolk und Welt社からフロイトの『喪とメランコリー』(*Trauer und Melancholie*) (1917)を初めてDDRでの出版に導いた。その後も、フューマンを通じて、Österreichische Bibliothek 出版社から1888年から1990年にかけて、3冊のフロイトの作品集が出版された。<sup>27</sup>フューマンにとってフロイトは、人間にとって最も重要な心、魂を探究した人だった。<sup>28</sup>そして、このフロイトによって、彼の心理学の世界への扉を開かれたのである。

フューマンは心理学に関する本を1000冊以上所有したが、その中でも最も多いのは、勿論、フロイトである。彼はフロイトの著作、また彼についての研究書を、約70冊所有した。それに次ぐのは、C.G.ユングで、彼の研究書を含み約40冊を所有した。それ以外にも、フューマンは幅広い心理学者の本を読み研究に励んだ。その多量からも、全てをここで挙げることは不可能だが、それが如何に広範囲にわたるものであったかを示す為に、一部の名前をここに挙げておく:アルフレッド・アドラー(Alfred Adler, 1870-1937), シャルロット・ベラート(Charlotte Beradt, 1907-1986), ジークフリート・ベルンフェルト(Siegfried Bernfeld, 1892-1953), ブルーノ・ベッテルハイム(Bruno Bettelheim, 1903-1990), ギュスターヴ・ル・ボン(Gustave Le Bon, 1841-1931), チャールズ・ブレンナー(Charles Brenner, 1961-), ハイน์リヒ・ブリュックナー(Heinrich Brückner, 1928-), F.J.J.ボイトエンディク(F.J.J. Buytendijk, 1887-1974), イゴール A. カルーソー(Igor A. Caruso, 1914-1981), ハンス・ディークマン(Hans Dieckmann, 1921-2007), エリク H. エリクソン(Erik H. Erikson, 1902-1994), ミシェル・フーコー(Michel Foucault, 1926-1984), エーリッヒ・フロム(Erich Fromm, 1900-1980), ゲオルク・グロデック(Georg Groddeck, 1866-1934), ギュンター・ハノルド(Günter Hunold, 1926-), ジャック・ラカン(Jacques Lacan, 1901-1981), メラニー・クライン(Melanie Klein, 1882-1960), アルフレッド・ローレンザー(Alfred Lorenzer, 1922-2002), アレクサンダー・ミッチャーリヒ(Alexander Mitscherlich, 1908-1982), マルガレーテ・ミッチャーリヒ(Margarete Mitscherlich,

---

<sup>25</sup> Vgl. Brigitte Krüger: „Ich bin nicht in allem ein orthodoxer Freudianer“ Franz Fühmann, Freud, C.G. Jung und die Träume. In: Literatur, Mythos und Freud. Potsdam: Universitätsverlag Potsdam 2009, S. 94.

<sup>26</sup> Franz Fühmann: Thesen zu Fragen von Literatur und Kunst. In: Im Berg. Rostock: Hinstorff Verlag 1993, S. 229.

<sup>27</sup> Vgl. Brigitte Krüger: „Ich bin nicht in allem ein orthodoxer Freudianer“ Franz Fühmann, Freud, C.G. Jung und die Träume, S. 94.

<sup>28</sup> Franz Fühmann: Die Briefe. Band 3. Briefwechsel mit Joachim Damm 1975-1984. Rostock: Hinstorff Verlag 2018, S. 42.

1917-2012), ジャン・ピアジェ(Jean Piaget, 1896-1980), オットー・ランク(Otto Rank, 1884-1939), ヴィルヘルム・ライヒ(Wilhelm Reich, 1897-1957), ハンス・サックス (Hanns Sacks, 1881-1947), テオドル・ライク(Theodor Reik, 1888-1969)等である。彼の読書傾向の特徴として、フロイト以降の心理学者の本を集中的に読んでいることが分かる。

フューマンの読書の特徴として、彼は本を読む際、頻繁に鉛筆か色とりどりのペンで下線やコメントを書き込んだ。それらは、フューマンがどの本を集中的に読んだのかを示す証拠でもある。それらの書き込みが見られた本は、例えば以下の著作である：ベルンフェルトの *Die heutige Psychologie der Pubertät*, ベッテルハイムの *Die Geburt des Selbst* と *Kinder brauchen Märchen*, ボンの *Psychologie der Massen*, ブレンナーの *Grundzüge der Psychoanalyse*, カルソーの *Soziale Aspekte der Psychoanalyse* と *Die Trennung der Liebenden*, フーコーの『監獄の誕生』, 『知への意志』と『言語表現の秩序』, グロデックの *Das Buch vom Es*, ランクの *Der Künstler*, *Psychoanalytische Beiträge zur Mythenforschung* と *Das Trauma der Geburt*, ランクとサックス共著の *Die Bedeutung der Psychoanalyse für die Geisteswissenschaften*, ライヒの *Charakteranalyse*, *Massenpsychologie des Faschismus* と *Der triebhafte Charakter*, ライクの *Wie man Psychologe wird*<sup>29</sup> これらの著作には、彼の研究的、また批判的読解の跡が見られた。しかしながら、どの著作がフューマンの夢の構想にとって重要であったのか、彼の筆跡だけを頼りに判断をすることは出来ない。なぜなら、彼が度々夢研究の際、C.A.マイヤー(1905-1995)<sup>30</sup>の『夢の意味』(*Die Bedeutung des Traumes*) (1972)の本を引用しているのにも関わらず、実際の本には何も筆跡が残っていなかったという例が有るからである。しかし、これらの筆跡は、フューマンが夢の構想を練る際、どの著作を読み、何に影響され、思考を巡らしたのかを示す貴重な資料であることには間違いない。

### 3. 夢文学への取り組み

#### 3.1. 夢のタイプライター化

ベルリン芸術アカデミーには、1965年から1980年代頃にかけての約320ものタイプライターで打たれた夢テキストが残されている。ここで言う夢テキストは、実際にフューマンが見た夢を記録したもので、夢日記のようなものである。テキストには、日付と年号が記され、自宅でない場所で見た夢であった場合には、旅行先の街の名前や、ホテルの名前が記されることもある。その他にも、昨日何をし、読み、見たか等といった事も記されてい

<sup>29</sup> 多くの作品が邦訳されていない為、邦題があるもの以外はドイツ語タイトルを表記しておく。

<sup>30</sup> C.A.マイヤー(C.A.Meier)はスイスの精神科医、ユング派分析者。ユングと研究を共にした人物で、1948年にチューリッヒにユング研究所が設立された際には、初代所長となり、1957年まで勤めた。(C.A.マイヤー著、河合隼雄監修、河合俊雄訳：夢の意味(創元社)、1989年、215～216頁参照。)



る場合もある。また、夢の不明確な箇所や忘れてしまった箇所には、「定かでない」や「忘れた」等と括弧をつけて本文中にコメントが書き加えられている。ほぼ、どのテキストにも日付と年号は記されているが、場所やコメントは毎回ではない。これらの夢テキストは、フューマンが手書きで書き留めたものを、再びタイプライターで打ち直したものである。フューマンの自筆は研究者の間でも解読が困難である為、これらのタイプライターで打ち直された夢テキストは、かなり貴重な資料である。時々、本人でさえ自身の字を読めないことがあったようである。というのも、手書きの夢日記をタイプライターで書き写す際、解読困難な箇所にはコメントが添えられている、例えば、1966年1月17日の夢テキストには「形容詞が解読不可能」、また1966年12月6日のテキストには「主語が読めない」等と書かれている。<sup>31</sup>

複雑な筆跡は読み手には障害と思われても、作家にとっては有利に働く場合もある。解読不可能な筆跡が暗号となり、私的な領域を守る砦となってくれるからである。日記や手紙、手記や夢記録等といった、個人と強く結びつく物は全て、読者や研究者にとって喉から手が出るほど魅力的なものである。そしてそれは同時に、作家のプライバシーを侵害するリスクを伴う。まして夢という、欲望や、願望、トラウマや思想等が強く映し出される分野は、特に好んで世間に公表したくないものだろう。フューマンにもこのような葛藤があったようで、1970年2月1日の夢日記の下に、以下のフリードリヒ・ニーチェ(1844-1900)の『曙光』(*Morgenröte*) (1881)からの言葉を書き写している。<sup>32</sup>

Der Traum und die Verantwortlichkeit. - In Allem wollt ihr verantwortlich sein! Nur nicht für eure Träume! Welche elende Schwächlichkeit, welcher Mangel an folgerichtigem Muthe! [...]<sup>33</sup>

夢と責任。—君たちは、何事も責任を負おうとする！ただ、夢においては責任を負おうとしない！なんという憐れな弱さ、なんという一貫性に欠けた勇気！

この引用からも、フューマンが夢文学への創作意欲と羞恥との間で揺れていることが分かる。美しく、幻想的な夢を公にすることには誰も躊躇わないが、惨めで自分の弱さが明らかになっている夢を誰が進んで公表したいだろうか？フューマンの夢日記には、彼の母、父、妻、娘、友達等、プライベートな事柄が多く登場する。フロイトが、夢は願望であると述べたように、<sup>34</sup>フューマンの大半の夢は、彼の願望や欲望を容赦なく露呈する。自分の

<sup>31</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792.

<sup>32</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 794.

<sup>33</sup> Friedrich Nietzsche: *Morgenröte*. In: *Morgenröte, Idyllen aus Messina, Die fröhliche Wissenschaft*. München/Berlin/New York: Deutscher Taschenbuch Verlag/Walter de Gruyter 1988, S. 117.

<sup>34</sup> Sigmund Freud: *Die Traumdeutung*. In: *Gesammelte Werke*. Köln: Anaconda Verlag 2014, S. 128.



夢を元に文学作品を創作することは、秘めておきたい繊細な部分を公にすることでもあるのだ。

ここで着目したいのは、フューマンが夢日記をタイプライターで打ち、わざわざ他者に「読み易くした」という事実である。自分の為だけなら、他人には判り辛い手記の夢日記の方が都合が良かったはずである。それにも関わらず、彼は約 320 もの夢をタイプライターで打った。おそらく、彼がこの作業を始めたのは、1972 年であると推測する。この年に、フューマンは少なくとも過去 3 年分、1965 年、1966 年、1967 年の夢をタイプライターで打った。なぜなら、1965 年 4 月 8 日、4 月 20 日、5 月 24 日、9 月 28 日の夢テキストには、間違えて一度 1972 年と打たれた形跡があるからである。<sup>35</sup>これと同様の間違いを彼は、1966 年 12 月 8 日、1967 年 1 月 14 日の夢テキストでも繰り返している。<sup>36</sup>また、本来 1967 年 7 月??日の夢テキストでは、彼は年号を間違えるだけでなく、日付をも間違え、1972 年 10 月 13 日と全く違う日付を一度打ってしまっている。<sup>37</sup>これらの度重なる誤りから、1972 年から夢のタイプライター化に取り組み始めたことが判明した。この時期に彼は、約 190 の過去の夢テキスト、またそれと並行して、現在進行形で 1972 年の夢をタイプライターで記録した。1972 年と書かれた、約 60 のタイプライターで打たれた夢テキストが残されていることから、彼は 1972 年に合計して約 250 もの夢テキストを打ったことが分かる。この膨大な量からも、なぜ頻繁に日付が混乱し、打ち間違いが起こったのか容易に想像出来る。

1972 年という年は、フューマンの作家人生の転機となった作品『22 日間 それとも 人生の半分』が出版される前年である。この作品は、夢と日記が混合された作品である。この作品の夢の部分執筆する際に、フューマンはこれまでの夢日記を見直し、選出した。<sup>38</sup>この作品は、彼に過去の夢テキストと向き合う機会を与えたのである。この作業の中で、彼は改めて夢の持つ文学の可能性に気付いたのではないだろうか。それが、夢のタイプライター化に取りかかる引き金となった。後に、彼は作家として、夢に潜んでいる文学的可能性を可能な限り引き出し、夢文学に挑戦する決意を表明している。<sup>39</sup>1983 年に、フューマンは、約 500 の夢をこれまでに書き留めたと述べている。<sup>40</sup>つまり、フューマンはその内の 3 分の 2 の夢をタイプライターで打ったのである。

1 年後の、1973 年 5 月 25 日にフューマンは当時の彼の担当の編集者クルト・バット

---

<sup>35</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792.

<sup>36</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792 und 793.

<sup>37</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 788.

<sup>38</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 210.

<sup>39</sup> Vgl. ebd., S. 212.

<sup>40</sup> Vgl. ebd., S. 38.

(1931-1975)<sup>41</sup>に以下の手紙を送っている。

ich hatte Ihnen schon 4 Seiten Begleitbrief geschrieben und habs wieder weggeschmissen; es ist sinnlos, das Fehlende in Kurzfassung erläutern zu wollen.

Daher in Kürzestfassung:

1. Das, was da ist, ist etwa ein Drittel
2. Das, was kommt, geht mehr in die Gegenwart.
3. es kommen 4 erotische Träume, davon 1 kraß obszön
4. Terzinen/Freie Rhythmen im angegebenen Verhältnis
5. Es ist noch nicht alles letzter Schliff, aber dennoch weiß ich schon jetzt, daß
6. Hauptfrage/ nicht alles gleichwertig ist. Es ist die Frage:

Soll man eine kleine Fassung machen und nur das Beste? Das kann man in diesem Umfang nicht durchhalten (oder man brauchte 5 Jahre dazu, ganz ernsthaft). Oder soll man es umfangreich wie geplant machen mit der klaren Kenntnis, daß es (natürlich nie unter einem bestimmten Niveau) in der Qualität etwas unterschiedlich wird. Ich neige zu dem letzteren, nach dem Grundsatz: Wer vieles bringt, denn es ist nämlich bei solchen Traumsachen so vertrackt: wenn manches eine bestimmte Empfangswelle nicht erreicht, kommt überhaupt nichts an, und bei manchem, was ich oder was Sie für schwächer halten, springt auf andre Leser viel über. Aber das muß man einfach überlegen. [...] <sup>42</sup>

私はあなたに既に 4 頁の送り状を書いたのだが、まともやそれを捨ててしまった。不足している事を短くまとめても意味がない。それ故、最も短い形で伝えようと思う。

1. ここで送っている分は、約 3 分の 1 である。
2. また送付する分は、最近の作品である。
3. 4 つ性的な作品があるが、そのうち 1 つは極めて猥褻である。
4. 3 連句、自由句は述べた通りの割合である。
5. これらはまだ全て磨き上げられた完成版ではない。しかし、現時点で既に以下の事が分かっている、
6. <主要な問い>全てが同じ出来でないということである。質問なのだが:  
ベストな作品だけを集めた小さな作品を作るべきだろうか? それを大規模な作品ですることは出来ない。(大規模な作品でそれをするならば、あと 5 年は必要である。真剣に考えて。) それとも、計画している通り一定の質のレベルを保ちつつも、

---

<sup>41</sup> クルト・バット(Kurt Batt)は文学学者、文学批評家、編集者。フューマンの最初の担当編集者。

<sup>42</sup> Franz Fühmann: Die Briefe. Band 1. Briefwechsel mit Kurt Batt. Rostock: Hinstorff Verlag 2016, S. 129f.

幾らか異なる出来の作品を含む大規模な作品を進めていくか。私の方針としては、後者の方に傾いている:もし大規模な本を作る、そしてそれが夢文学となると厄介である。幾らかの夢が一定の波長に達していないとなると、何も読者に届かないし、私かあなたが出来の弱いと思っている幾らかの作品が、読者を置いてけぼりにする可能性もある。このことについては、とにかくじっくりと考えなければならぬ。

フューマンはこの手紙でバットに、計画通り大規模な「夢の本」を進めていくか、それともより良い作品のみを集めた「夢の本」を作るべきかと尋ねている。この手紙と共に、計画している「夢の本」の2つのバージョンの目次(69の夢を含む目次と、71の夢を含む目次)を同封した。<sup>43</sup>この手紙は、フューマンが既に1973年には、具体的な「夢の本」の構想を練っていたことを証明しているのである。3週間後、1973年6月12日、バットはフューマンの問いに答えている。

bei allem, was geschieht, bin ich unfähig, ein Urteil über Literatur abzugeben, und sicher auch in dergleichen Fragen völlig unzuständig. Deshalb nur drei Sätze zu den „Träumen“, die auf die schönste Weise Wirklichkeitsnähe beweisen.

1. Sie sollten auf jeden Fall – über Publikation ist im Augenblick schwer zu reden – die Arbeit an dem Band fortsetzen und abschließen.
2. Mir scheint, daß ein solches Traumbuch nicht 150 Seiten überschreiten sollte, denn die Textstücke wollen natürlich wie Lyrik gelesen werden.
3. Naturgemäß müssen sich bestimmte Grundmotive wiederholen, allerdings würde ich mir wünschen, daß die Texte – entschuldigen Sie meine unwissenschaftliche Terminologie – mit archetypischen Grundsituationen, die bisher vorherrschen, nun ergänzt werden durch Texte, die mehr aktuellen Wirklichkeitsstoff mitnehmen. [...]<sup>44</sup>

私に投じられた質問全て、文学作品を左右する判決を私がする事は出来ないし、その権限を私は持っていない。そこで、最も美しい形で現実との接近を示している「夢たち」について3つのことだけ書いておく。

1. あなたはどんな場合も、出版することを目下として重要視すべきである。—仕事を続行し、完成させるという。
2. 私には、このような夢の本は150頁以上にならないべきだと思われる。というのもこれらの本は、勿論詩のように読まれるのを望まれる為。

---

<sup>43</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 803.

<sup>44</sup> Franz Fühmann: Die Briefe Band 1 Briefwechsel mit Kurt Batt, S. 131f.

3. 当然、ある定まった大もとの主題が繰り返されるべきである、—学術的でない用語ですまないが—、勿論私は、これまでの夢テキストは、元型論に根本を置いたものが多いが、それに更にアクチュアルな現実的素材が含まれているような夢テキストが加わることを願っている。

バットはフューマンに夢の本に対しての客観的、また現実的な意見を伝えている。バットは精力的にフューマンの夢を読み、その添削をしていた。日付は定かではないが、1973年にバットは鉛筆でフューマンの2つの夢小説、『アポロンの恩恵の夢』(*Der Traum von Apollons Gabe*)と『特徴のないものの夢』(*Der Traum von dem Unscheinbaren*)の添削を行っている。<sup>45</sup>彼の添削後、フューマンは『特徴のないものの夢』を最終原稿へと仕上げている。<sup>46</sup>バットはフューマンの計画を後押ししていたのである。

1970年代前半から、フューマンの「夢の本」出版計画は勢いを増していった。1972年から始めたと推測される、夢をタイプライターで打つ、夢を他者に「読み易く」した、この行為こそ、フューマンの夢文学への挑戦への決意を表しているのである。彼の中で、夢文学への創作意欲が羞恥心を上回った転機であり、自己分析の為だけだった夢日記の目的が変化した瞬間だった。夢のタイプライター化は、フューマンの夢プロジェクトの発展に必要な不可欠だった。作品について議論を交わすことも、添削してもらうことも、他者に自分の夢を読んでもらったからこそ成し得た事なのである。彼の勇氣ある決意は、着実に彼の夢を前進させた。

### 3.2. フューマンの夢文学

「夢の本」出版に向けて、順調に事が進むと思われたが、その勢いは減速していく。その理由の1つとして、彼の編集者であり、良き理解者、友であったバットの死が考えられる。彼の夢小説を添削し、計画を支えていたバットは、1975年2月20日43歳の若さで心筋梗塞によって亡くなってしまうのである。フューマンはエッセイで、我々は80年代先まで計画の数々を立てていたと述べている。<sup>47</sup>その計画の内に勿論、「夢の本」はあった。フューマンはまた一から、新たな編集者と、夢の本について話し合わなければならなかったのである。

1975年、フューマンは当初と計画の異なる、新たな夢の本の形式を出版社に提案した。<sup>48</sup>

---

<sup>45</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 798.

<sup>46</sup> Vgl. ebd.

<sup>47</sup> Vgl. Franz Fühmann: Ich habe meinen Lektor verloren. In: Essays Gespräche Aufsätze 1964-1984. Rostock: Hinstorff Verlag 1983, S. 196.

<sup>48</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 134.

それは『Parna』というタイトルで、11の夢と6つの短編が織り交ぜられた作品だった。しかし、その計画も以前の計画と同様、短期間での完成は難しいものだった。フューマンは以下の手紙を、1975年11月25日にコンラッド・ライヒ(1928-2010)<sup>49</sup>に送っている。

Man kann geistige, zumindest literarische Arbeit, zumindest in der Hauptsache, nämlich im wirklich Neuen und Unerprobten, so nicht leisten. Vielleicht wird „Parna“ dieses Frühjahr fertig, vielleicht in 10 Jahren, vielleicht nie (Ödipus hat 20 Jahre gebraucht, genau 20 Jahre). (Nur eines weiß ich von P.: dieses Jahr wirds nicht!)<sup>50</sup>

精神的な、少なくとも文学的な仕事を、少なくとも核心において、すなわち本当に新しく未だ試されていない形で成し遂げることは出来ない。もしかすると、『Parna』は来春出来上がるかもしれないし、もしかすると10年後かもしれない、もしかすると完成することはないかもしれない。(オイディプスには20年かかった、丁度20年)。(これだけははっきりしている、『Parna』は今年中には完成しない!)

翌年になっても、フューマンは『Parna』制作にかなり苦戦していた。<sup>51</sup>そして、フューマンが当初言った、「もしかすると完成しないかもしれない」という言葉は残念ながら現実となってしまう。フューマンの2冊目の夢の本計画は、未完のまま終わったのである。

1983年、フューマンの夢の本は、『13の夢』(*Dreizehn Träume*) (1985)というタイトルでEdition Leipzig社からの出版を取り決める。<sup>52</sup>ここで興味深いのは、通常彼の著作を出版しているロストックのHinstorff社からの出版でないことである。何度もHinstorff社に提案しているものの、出版に至らなかったことから、Hinstorff社での「夢の本」出版が如何に難しかったかを物語っている。バットはこの計画に対し、かなり協力的だったが、2人目の編集者ブリグニッツは彼ほどではなかったのかもしれない。フューマンの夢テキストをブリグニッツが読み、添削をした記録はまだ見つかっていない。世代も同じで、同性、共通の作家に興味を持ち議論を交わしていたバットに対し、ブリグニッツは若く、女性だった。彼女が編集し出版した、フューマンの夢の本『Paranyasの間で』では、性的な夢は除外される傾向にある。実際に出版された『13の夢』には文学的な夢の作品が選出されており、明らかに性的な夢は含まれていない。2人の間で、夢の本への構想の相違があったのかもしれない。『13の夢』は、タイトル通り13の夢を含んだ作品である。文のみならず、画家のヌリ

---

<sup>49</sup> コンラッド・ライヒ(Konrad Reich)は、1959年から1978年までロストックのHinstorff社の主任。

<sup>50</sup> Franz Fühmann: Briefe 1950-1984. Rostock: Hinstorff Verlag 1994, S. 176f.

<sup>51</sup> Vgl. ebd., S. 201.

<sup>52</sup> Vgl. Franz Fühmann: Die Briefe. Band 2. Briefwechsel mit Ingrid Prignitz. Rostock: Hinstorff Verlag 2017, S. 456.

ア・ケベード(1938-) <sup>53</sup>のイラストと共に出版され、幻想的な作品として仕上がっている。しかし、この本が出版されたのは 1985 年、彼の死後 1 年後だった。フューマンは実際に出版を見る事なく亡くなったのである。

#### 4. おわりに

フューマンの作家としての自我が芽生えた作品、それは『22 日間 それとも 人生の半分』の作品からである。<sup>54</sup>この転機となった作品こそまさに、日記と夢が組み合わせられた作品で、夢文学でもある。まるで夢の中で自我が放たれるように、フューマンの、作家としての自我がこの作品で放たれた。<sup>55</sup>この作品以降、彼はフロイト、E.T.A.ホフマン、ゲオルク・トラークル、鋤山等を題材として創作に励んでいるが、これらはどれも夢と深い結びつきのあるものばかりである。このことから、夢はフューマンの文学の根幹を成すものだと分かる。

純粋にフューマンの夢のみを含む作品は、死後 Edition Leipzig 社から出版された『13 の夢』、一冊だけである。フューマンが自ら選び、発表した夢は、500 もの夢から考えると、それは氷山の一角である。フューマンにとって『13 の夢』は通過点であり、長年目指した夢文学の最終地点ではなかった。彼は、没する約 1 ヶ月前、1984 年 6 月 3 日に以下のような手紙をプリグニッツに送っている。

Du, sag mal, könnten wir nicht wirklich auch u.a. ein größeres Traumbuch ins Auge fassen, mit vielleicht 33 Träumen? Das große mit 75 war zuviel, aber so um die dreißig rum müßten fertig zu kriegen sein. [...] <sup>56</sup>

およそ 33 の夢を含む大きな夢の本を作ることは本当に出来ないのか、君の考えを聞か

<sup>53</sup> スリア・ケベード(Nuria Quevedo)はスペイン出身の画家、グラフィックアーティスト。

<sup>54</sup> フューマンは当時既に長く DDR に住んでいたが、生まれはボヘミアである。ボヘミアは戦前のチェコスロバキアに当たる地で、プラハの春は、彼の故郷で起こった衝撃的な出来事だった。社会主義の見せた非人間的な民衆への弾圧は、フューマンに社会主義の現実を突きつけることになった。これを機に、彼は社会に対し批判的な作家へと変わっていく。それまで、社会主義の文化政策を意識した作品を執筆していたが、それに囚われなくなる。『22 日間 それとも 人生の半分』は、プラハの春以降に書かれた最初の作品である。後に、彼はインタビューで「真」の作家人生はこの作品から始まったと述べている程、彼の作家人生にとって大切な作品である。Vgl. Josef-Hermann Sauter: Interview mit Franz Fühmann, S.33. und Franz Fühmann: Franz Fühmann im Gespräch mit Wilfried F. Schoeller. In: Den Katzenartigen wollten wir verbrennen. Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag 1983, S. 362f.

<sup>55</sup> 民衆を煽動するために、DDR の文化政策は作家達に労働を描く文学を求めた。しかし、この方針は結果的に、作家の個性や自由を狭める事となった。Vgl. Wolfgang Emmerich: Kleine Literaturgeschichte der DDR. Darmstadt/Neuwied: Hermann Leuchterhand Verlag 1981, S. 86.

<sup>56</sup> Franz Fühmann: Die Briefe. Band 2. Briefwechsel mit Ingrid Prignitz, S. 477.

せて欲しい。75 の夢の本は大きすぎだった、30 くらいならきつと完成させる事が出来る。

手紙からは、没する前とは思えないほどの野心と創作意欲が溢れている。彼はプリグニッツに、75 の夢は無理だとしても、33 の夢を含む作品ならやり遂げられると意気込んでいる。フューマンには 33 の夢ならこの年に完成させる覚悟があったのだろう。なぜなら、ほぼ同時期に書かれた手紙で、1985 年の死を連想させる手紙があるからである。<sup>57</sup>つまり、33 という数は、フューマンが残された時間を考慮して挙げた現実的な数字だったのである。彼は積極的に朗読会で自信の夢を朗読し、聴衆から拍手を浴び、笑いを取る等の良い反応を得ていた。<sup>58</sup>それが確信、そして自信ともなり、いつかは大きな「夢の本」を出版したいと願いつづけていたのである。しかし、その夢が叶う事はなかった。大きな「夢の本」、33 の夢の完成よりも早く、彼の死はやってきたのである。フューマンが夢に費やした時間、その労力は莫大なものだった。それほどに、夢は彼の文学世界にとってなくてはならない存在だった。<sup>59</sup>長年夢見た、大きな「夢の本」は、彼の夢文学の最終地点のみならず、文学の最終地点でもあったのかもしれない。病に苦しめられ、体力的に苦しかった晩年に、それでも彼に筆をとらせ、作家として彼を奮い立たせた題材は、やはり「夢」だった。しかしその結末を誰も見る事はなかった。彼の「夢の本」は、文字通り「夢」の本となって幕を閉じたのである。

---

<sup>57</sup> 1984 年 5 月 31 日、バーバラ・フリッシュムス(Barbara Frischmuth)宛への手紙に、「1985 年のオーストリアへの旅行を夢見て、計画しているが、それは夢で終わるだろう。」と綴っている。Vgl. Franz Fühmann: Briefe 1950-1984, S. 473f.

<sup>58</sup> 1983 年 6 月 30 日、彼は以下のような手紙を編集者プリグニッツに送っている「君に言っただろうか、夢が朗読でヒットしたことを？舞台の上で拍手喝采だった、朗読の最中にも、笑いや拍手が、例えば『腹の夢』の時に起こり、そして、『水演劇の夢』朗読の際には、深い、深い沈黙が起こった。しかし、私は今新しい夢の本創作への誘惑にかられてはいけない。Edition Leipzig 社のことがあるから！」1984 年の 6 月 3 日の手紙でも、ハイデルベルクでの朗読会でいくらかの夢小説を朗読し、非常に大きな共感を得たことを述べている。Vgl. Franz Fühmann: Briefe 1950-1984, S. 464f., Franz Fühmann: Die Briefe. Band 2. Briefwechsel mit Ingrid Prignitz, S. 477.

<sup>59</sup> フューマンは最期のインタビューで、„In meinem Leben hat er eine riesige Funktion.“（私の人生にとって夢は非常に大きな役割を担っている。）と述べている。Vgl. Heinz Blumensath: Franz Fühmanns letztes Interview, S. 98.



## 参考文献

- Blumensath, Heinz: Franz Fühmanns letztes Interview. In: „Auf's Ganze aus sein“ Franz Fühmann in seiner Zeit. Berlin: Friedrich Ebert Stiftung 2016.
- Emmerich, Wolfgang: Kleine Literaturgeschichte der DDR. Darmstadt/Neuwied: Hermann Leuchterhand Verlag 1981. Fühmann, Franz: Franz Fühmann im Gespräch mit Wilfried F. Schoeller. In: Den Katzenartigen wollten wir verbrennen. Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag 1983.
- Földémyi, László: Abgrund der Seele. München: Mattheus& Seitz 1994.
- Freud, Sigmund: Die Traumdeutung. In: Gesammelte Werke. Köln: Anaconda Verlag 2014.
- Fühmann, Franz: Briefe 1950 – 1984. Rostock: Hinstorff Verlag 1994.
- Fühmann, Franz: Die Briefe. Band 1. Briefwechsel mit Kurt Batt. Rostock: Hinstorff Verlag 2016.
- Fühmann, Franz: Die Briefe. Band 2. Briefwechsel mit Ingrid Prignitz. Rostock: Hinstorff Verlag 2017.
- Fühmann, Franz: Die Briefe. Band 3. Briefwechsel mit Joachim Damm 1975-1984. Rostock: Hinstorff Verlag 2018.
- Fühmann, Franz: Der Sturz des Engels Erfahrungen mit Dichtung. Hamburg: Hoffmann und Campe 1982.
- Fühmann, Franz: Franz Fühmann im Gespräch mit Wilfried F. Schoeller. In: Den Katzenartigen wollten wir verbrennen. Hamburg: Hoffmann und Campe Verlag 1983.
- Fühmann, Franz: Ich habe meinen Lektor verloren. In: Essays Gespräche Aufsätze 1964-1984. Rostock: Hinstorff Verlag 1983.
- Fühmann, Franz: Thesen zu Fragen von Literatur und Kunst. In: Im Berg. Rostock: Hinstorff Verlag 1993.
- Fühmann, Franz: Unter den Paranyas. Rostock: Hinstorff Verlag 1988.
- Fühmann, Franz: [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 788, 792, 793, 794, 798 und 803.
- Jazower, Ignaz: Das Buch der Träume. Berlin: Ernst Rowohlt Verlag 1928.
- Krätzer, Jürgen: Die Stasi als Literaturarchiv: Die Wandlung des Franz Fühmann vom „Salomon“ zum „Filou“. In: Einblick in das Herrschaftswissen einer Diktatur – Chance oder Fluch? Plädoyers gegen die öffentliche Verdrängung. Opladen: Westdeutscher Verlag 1996.
- Krüger, Brigitte: Der Traum vom „Buch der Träume“ Franz Fühmanns Traumkonzept. In: Text + Kritik. München: Richard Boorberg Verlag 2014.
- Krüger, Brigitte: „Ich bin nicht in allem ein orthodoxer Freudianer“ Franz Fühmann, Freud, C.G. Jung und die Träume. In: Literatur, Mythos und Freud. Potsdam: Universitätsverlag Potsdam 2009.
- Lichtenberg, Georg Christoph: Aphorismen. Zürich: Manesse Verlag 1947.
- Nietzsche, Friedrich: Morgenröte. In: Morgenröte, Idyllen aus Messina, Die fröhliche Wissenschaft. München/Berlin/New York: Deutscher Taschenbuch Verlag/Walter de Gruyter 1988.
- Sauter, Josef-Hermann: Interview mit Franz Fühmann. In: Positionen der DDR-Literaturwissenschaft Auswahl aus den Weimarer Beiträgen (1971-1973) Band 2. Kronberg/Taunus: Scriptor Verlag 1974.
- Seghers, Anna: Die Reisebegegnung. In: Erzählungen 1963 – 1977. Berlin/Weimar: Aufbau Verlag 1981.
- Wieters, Oliver: Der Traum als literarische Form: Franz Fühmann Traum-Erzählungen und-Notate, Tübingen, 1990.
- 東 憲二:「社会主義」の発展と崩壊の過程における文学(東ドイツ短編集刊行委員会編「エルベは流れる—東ドイツ短編集—」同学社, 1992年, 312-318頁所収)。
- C. A. マイヤー著, 河合隼雄監修, 河合俊雄訳: 夢の意味, 創元社, 1989年。

## Franz Fühmanns Traumliteratur

Tomomi KLEINERT

Franz Fühmann (1922-1984), einer der bedeutendsten Schriftsteller der DDR, führte seit früher Zeit neben seinem Tagebuch auch eine Art Traumtagebuch, in dem er seine Träume notierte. Ziel der Niederschriften war anfänglich nur deren Verwendung zur Selbstanalyse. Die intensivere Auseinandersetzung mit Sigmund Freuds Erkenntnissen hatte ihn dazu geführt, seine eigenen Traumforschung zu entwickeln. Die Theorie gab ihm eine wissenschaftliche Grundlage zur Erklärung des Phänomens Traum, das ihn fortan stark in seinen Bann zog. Fühmanns Nachlass-Bibliothek<sup>60</sup> lässt sein außerordentliches Interesse deutlich werden. Unter den etwa 17000 Büchern haben allein über 1000 einen Bezug zur Psychologie. Er näherte sich dem Traum nicht nur auf psychologischer Ebene, sondern auch über die Literatur - er las beispielsweise E.T.A. Hoffmann, Shakespeare, Jean Paul, Georg Trakl.

Als Fühmann sein Werk *Zweiundzwanzig Tage oder Die Hälfte des Lebens* (1973) verfasste, hatte er seine vergangenen Traumniederschriften erneut gesichtet. Das Buch ist eine Kombination zwischen Tage- und Traumbuch. Wie Wünsche oder Triebe im Traum grenzen- und regellos sind, befreite sich in diesem Werk sein „Es“ als Schriftsteller. Bis zu diesem Zeitpunkt wirkte er als Literat an der Kulturpolitik der DDR mit und beförderte sie. Aber nach der Niederschlagung des Prager Frühlings in der Tschechoslowakei, aus der Fühmann stammte,<sup>61</sup> setzte ein Umdenken bei ihm ein, das ihn der DDR gegenüber deutlich kritischer werden ließ.<sup>62</sup> *Zweiundzwanzig Tage oder Die Hälfte des Lebens* ist das erste Buch Fühmanns, das nach dem Ereignis erschien, und markiert einen Wendepunkt in seinem Schaffen. Von da an wandte er sich von der Kulturpolitik ab und widmete sich vermehrt *seiner* Literatur.<sup>63</sup> Durch das Werk wurde sein Wunsch, ein Traumbuch zu veröffentlichen, greifbarer. Im Jahr 1972 fing Fühmann an, seine Träume auf der Schreibmaschine abzutippen,

---

<sup>60</sup> Historischen Sammlungen der Zentral- und Landesbibliothek zu Berlin

<sup>61</sup> Fühmann lebte damals schon lange in der DDR, war aber in Böhmen, in der Vorkriegs-Tschechoslowakei, geboren. Also war ihm Tschechien eine seiner beiden Heimaten. Vgl. Josef-Hermann Sauter: Interview mit Franz Fühmann, S.33.

<sup>62</sup> Die Niederschlagung des Prager Frühlings führte bei Fühmann zu einer völligen Ablehnung der Kulturpolitik der SED und der Regierung der DDR. Vgl. Jürgen Krätzer: Die Stasi als Literaturarchiv: Die Wandlung des Franz Fühmann vom „Salomon“ zum „Filou“. In: Einblick in das Herrschaftswissen einer Diktatur – Chance oder Fluch? Plädoyers gegen die öffentliche Verdrängung. Opladen: Westdeutscher Verlag 1996, S. 95.

<sup>63</sup> Für den geistigen Aufbau der DDR forderte die Kulturpolitik die Schriftsteller ihres Landes dazu auf, über das Schaffen und Leben der Werktätigen zu schreiben. Diese Politik hatte zur Folge, dass die Individualität der Schriftsteller bzw. die Freiheit ihres Schreibens inhaltlich beschränkt wurde. Vgl. Wolfgang Emmerich: Kleine Literaturgeschichte der DDR, S. 86.

vermutlich in Vorbereitung eines umfassenderen Traumbuches.<sup>64</sup> Dass dies 1972 erfolgte, ist daran abzulesen, dass er mehrmals die falsche Jahreszahl verwendete. Er schrieb beispielsweise 1972 statt 1965.<sup>65</sup> Dieser Fehler wiederholt sich vor allem bei den Träumen von 1965, 1966 und 1967.<sup>66</sup> Fühmann hat demnach etwa 190 Träume in besagtem Jahr abgeschrieben. Parallel dazu zeichnete er weiterhin auch seine jüngsten Träume auf, wodurch ungefähr 60 weitere Traumtexte entstanden und die Gesamtzahl der Träume, die er „lesbar“ machte,<sup>67</sup> für das Jahr 1972 auf zirka 250 anstieg. Im Archiv der Akademie der Künste zu Berlin können über 300 Traumtexte in Schreibmaschinenversion eingesehen werden.<sup>68</sup> Die Mehrzahl seiner Träume enthält Darstellungen seines wildcharakterlichen Triebes und verrät seine nackte Persönlichkeit. Trotz dem Risiko des Zugriffs auf seinen privaten Bereich, fasste Fühmann den Entschluss, seine noch rohen Traumtexte in einer Form zu bringen, die es dem Leser möglich macht, deren Inhalt zu entziffern. 1983 erwähnte er, dass er bisher ungefähr 500 Träume aufgeschrieben habe.<sup>69</sup> Er hat also zwei Drittel davon lesbar gemacht. Sein Mut birgt die Gefahr, dass Intimes nach außen dringt, ebnet aber auch den Weg für neue Möglichkeiten in Bezug auf sein Traumbuch.

Sein erstes Vorhaben der Gestaltung des Werks war es, ein umfangreiches Traumbuch hervorzubringen, das zirka 70 Träume enthalten sollte. 1973 hatte er dessen Inhaltverzeichnis bereits in zwei Versionen skizziert und darüber mit seinem Lektor diskutiert. Das Traumbuchprojekt schien Gestalt zu gewinnen, doch tauchte Anfang 1975 eine Schwierigkeit auf. Er verlor seinen vertrauten Lektor Kurt Batt, der ihm bei der Planung des Buches große Unterstützung geleistet hatte.<sup>70</sup> Nach seinem Tod legte Fühmann die Arbeit an dem Projekt erst einmal nieder. 1975 übergab er dem

---

<sup>64</sup> Am 25.05.1973 schickte Fühmann an Kurt Batt zwei Versionen eines Inhaltsverzeichnisses für das geplante Traumbuch, die 69 bzw. 71 Träume umfassten. Im Archiv befindet sich auch die bleistiftgeschriebene Korrektur seiner Traumerzählungen von Batt aus dem gleichen Jahr. Hieran knüpft sich meine These: 1973 war der inhaltliche Rahmen seines Traumprojektes bereits erkennbar, da Fühmann 1972 die Mehrzahl seiner Träume lesbar gemacht hatte, um sein zukünftiges Traumbuch zu veröffentlichen. Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 803. und Sign. 798.

<sup>65</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792.

<sup>66</sup> Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792 und 793.

<sup>67</sup> Es ist unter den Forscher wohl bekannt, dass seine Handschrift schwer zu entziffern ist. Anscheinend ist dies für ihn auch manchmal nicht leicht. In seinen Notaten finden sich bisweilen Anmerkungen hierzu, z.B. in den Traumabschriften vom 17.01.1966, in denen er „Adjektiv unlesbar“ und dem Traum vom 06.12.1966, in dem „Subst. unleserlich“ in Klammern vermerkte. Vgl. Franz Fühmann. [Unter den Paranyas] Träume. Akademie der Künste/Berlin, Franz-Fühmann-Archiv Sign. 792.

<sup>68</sup> Im Archiv der Akademie der Künste zu Berlin gibt es auch eine große Anzahl seiner handschriftlichen Traumniederschriften.

<sup>69</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 38.

<sup>70</sup> Vgl. Franz Fühmann: Ich habe meinen Lektor verloren, S. 196.

Hinstorff Verlag einen neuen Plan für ein Traumbuch mit Namen *Parna*.<sup>71</sup> Es ist eine Mischung aus Träumen und Geschichten. Er bemühte sich zwar um das Erscheinen des Werkes, doch ohne Erfolg. Erst in den achtziger Jahren bekam er wieder eine Gelegenheit, ein Traumbuch zu veröffentlichen. Es handelt sich um sein Buch *Dreizehn Träume* (1985), verlegt von der Edition Leipzig. Schon an dem Titel wird deutlich, dass es eine weitaus kleinere Fassung ist, als er ursprünglich geplant hatte. Anhand eines Briefes, den er kurz vor seinem Tod an seine zweite Lektorin Ingrid Prignitz verfasste, ist erkennbar, dass *Dreizehn Träume* zwar sein erstes (und durch sein Ableben letztes) reines Traumbuch, aber nicht sein endgültiges Ziel in Hinblick auf die Ausführung seiner Traumkonzeption war. In dem Brief äußerte er deutlich den Wunsch, letztendlich sein großes Traumbuch herausbringen zu wollen.

Damals war er wegen seiner Krebserkrankung körperlich bereits schwer angeschlagen und ahnte wohl schon, dass sich sein Leben dem Ende zuneigte. Dessen ungeachtet legte er die Feder nicht nieder, sondern beschäftigte sich weiter mit der Traumliteratur. Bis zum Ende reizte und begleitete ihn der Traum in seinem Wirken als Schriftsteller und Mensch. Der Traum avancierte für Franz Fühmann zum wichtigsten Element seines literarischen Schaffens. Shakespeare, Freud, Hoffmann, Trakl, Bergwerk - alle Projekte, in die er sich stürzte, sind eng mit dem Traum verbunden. Für seine Traumkonzeptionen wandte er enorme Zeit und Kraft auf. Bevor er den Gipfel des Traumbergs erreichte, erlosch seine Lebensflamme. Sein Traumbuch blieb somit wirklich ein *Traumbuch*.

---

<sup>71</sup> Vgl. Franz Fühmann: Unter den Paranyas, S. 134.